

# ICF普及・活用に向けたイメージ図

短期

中期

長期

※ICFの心身機能・身体構造、活動、参加、環境因子等それぞれの側面のバランスをもって進める。

※状態を把握しやすい入院患者や、専門職の多い環境など、ICFを活用しやすい医療現場から進める。

具体的な取組

- これまでの関連施策、研究等の確認
- 特定の疾患を念頭においてICF評価セット(日本版)の作成

現状・課題

- 「ICF」の概念は共感を得て、理解されているが、項目はあまり活用されていない。
- 多様な視点を含む分類で、簡便でなく使いづらい。
- 様々な医療現場すでにICF以外の評価指標が利用されている。
- 教育環境の整備が必要である。

次のステップ

- ICF評価セット(日本版)を用いた有用性確認のための一次的活用
- ICF評価セット(日本版)の拡充と多様な疾患・状況への展開
- 医療・介護・福祉分野での活用の検討(例:地域包括ケア等)

普及・活用

2016

2018

WHOにおいて開発中であるICD-11※をWHO執行理事会へ報告

WHO-FICネットワーク年次会議  
2016 東京

ICD-11 世界保健総会で承認

※ICFの要素の一部を含むことも議論中

第5回 シンポジウム

第6回 シンポジウム

第7回…… (年1回 開催予定)

総括